六条御息所の怨霊についての考察　四期生　吉田アミ

①【夕顔】夕顔に憑いたのは「なにがしの院」に潜む家霊であり、六条御息所の生霊ではない。御息所はプライドが極めて高い女性であるが故に、身分が高く、源氏の正妻・正妻格の女性にしか憑かない。明石君は身分が低い為、藤壺は妻でない為、憑かれていない。身分が低く、側室でもない、夕顔に憑く筈がない。

②【葵上】葵上に憑いたのは六条御息所の生霊である。原因は源氏の正妻である葵上に対する嫉妬より、栄華・権勢を誇る左大臣家の娘である葵上に対する妬みの側面が強い。積もり積もった妬みに、「葵祭での車争いで大衆の面前で大恥をかかされた」ことが導火線となり、生霊と化したと考える。

③【紫の上】六条院は六条御息所から譲り受けた邸宅を改築したもの。源氏最愛の紫の上(正妻格)に憑いたのは、六条の地に潜む御息所の家霊である。源氏への愛憎による懊悩の果てに。

④【女三宮】六条御息所の家霊が幼いばかりの正妻・女三宮に憑いたのは恨みによる。御息所は前坊の妃。前坊の死の原因は、右大臣家にあったと想像する。前坊の死・廃太子により、東宮となったのは、女三宮の父・朱雀帝。前坊は桐壺帝の同腹の弟。朱雀帝は桐壷帝の長男。前坊は早良親王を彷彿とさせる。